

特集：花き病害研究の新展開と環境保全型防除技術

# 東京都における花き病害の発生実態と対策

東京都農林総合研究センター <sup>たけうち</sup>竹内 <sup>じゅん ぼりえ</sup>純・堀江 <sup>ひろみち</sup>博道

## はじめに

東京都では、古くから多種多様な花きおよび植木などが栽培されているが、近年では野菜の直売を行っていた野菜農家がカジュアルフラワーの直売に着手し、農業収益が大幅に増加した成功事例が多い。また、都市環境の中で需要の高い観賞用の鉢花や植木類、地被植物（グラウンドカバープランツ）等の緑化植物が都内全域で栽培されている。一方、伊豆諸島では温暖な気候を利用し花き類や観葉植物の生産が重要な産業となっており、特にフェニックス、レザーファン、ルスカスなどの“切り葉”栽培では、我が国でも屈指の産地となっている。本稿では東京都における直売用切り花、グラウンドカバープランツおよび切り葉用のフェニックスに発生する病害とその対策について紹介する。

## I 直売用切り花類の栽培圃場に発生する病害

### 1 発生病害の特徴

東京都における直売型の花き生産は、野菜畑を中心に広がっている。したがって発生病害の種類は、花き導入前の栽培歴との関連が深く、特にウド、ナスなどの野菜が前作であった圃場では半身萎凋病、果樹が前作であった圃場では白紋羽病が、それぞれ花き類においても生育阻害要因となる。直売用花き類では、このように前作作物で発生していた土壌病害が栽培当初から発生し、作付年数が少ないにもかかわらず、連作障害様の被害を生じている。1994～2003年の調査では、直売用切り花生産において21科60品目に99種類の病害を確認した（表-1）。このうち27種類は、新病害として報告した。

#### (1) 主な土壌病害

直売用切り花類に発生している主な土壌病害の病原菌は *Verticillium dahliae* (A群, B群), *Rhizoctonia solani* (AG-1, AG-2-1, AG-2-2, AG-4), *Sclerotium rolfsii*, *Pythium aphanidermatum*, *Cylindrocladium floridanum*, *Rosellinia necatrix* 等の野菜、食用作物、果

樹等でも記録されている多犯性菌である。

同一病原菌であっても、品目によって発生程度の異なる場合が認められた。例えば *V. dahliae* (A群, B群) による半身萎凋病では、ルリタマアザミが壊滅的被害であっても隣接して栽培されているダリアでは軽微な発病で採花可能であるなど、同じキク科植物でも発病程度に大きな差異が認められた。また半身萎凋病の汚染圃場内であってもシソ科のモナルダなど発病していない花き類もあった。

#### (2) その他の病害

4科10品目で菌核病の発生が認められた。本病も野菜、切り花の共通病害であり、花き作付け前からの野菜栽培でも被害を生じていたものである。また、花き類では新品種の導入により特定の病害が発生する事例があり、特に宿根リモニウムうどんこ病とキンギョソウさび病では被害が甚大であった。

### 2 防除

現在、花き類での農業登録は少なく、また直売用切り花類の生産地は住宅地と近接し、薬剤防除は困難な場合が多い。そのため、直売用の切り花類の病害防除には耕種的な対策が極めて重要である。花き類の作付け、導入に当たり、品目の種類や圃場の栽培歴から重大な被害となるおそれのある土壌病害の発生を予測して被害を未然に防ぎ、罹病株からの栄養繁殖で病害汚染圃場を拡大させないように生産者を啓発・指導する必要がある。また、新品種の導入で今まで被害がなかった病害によって深刻な被害を生じることがあり、生産者と指導機関との連絡を密にし、迅速な情報提供で発生を未然に防止することが重要である。

## II グラウンドカバープランツ栽培圃場に発生する病害

### 1 発生病害の特徴

グラウンドカバープランツ（カバープランツ）の種類はわい性やほふく性の針葉樹・広葉樹、ササ類、草花、シダ類等多種多様である。カバープランツは一度期に多数の株を植栽する必要があるため、繁殖が容易で大量生産が可能な管理のしやすい植物が用いられていた。しかし最近では、多様な需要に応えるため、葉、花、実等に